

# 「freundlich」と「hoflich」：コミュニケーション行動における異文化の諸相

著者	西嶋 義憲
雑誌名	金沢大学経済学部論集
巻	28
号	2
ページ	147-170
発行年	2008-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/9867">http://hdl.handle.net/2297/9867</a>

# 「freundlich」と「höflich」\*

—コミュニケーション行動における異文化の諸相—

西 嶋 義 憲

## 目 次

1. 理論的予備考察
  1. 1. 「Höflichkeit」とコミュニケーション行動評価概念 (BKKV)
  1. 2. BKKV・BKKV 表現・語彙意味論
  1. 3. 社会的・文化的に特徴づけられた BKKV
  1. 4. BKKV と通常性
2. 問題設定
  2. 1. 「höflich」は BKKV を代表するか
  2. 2. コミュニケーション上重要な概念「freundlich」
  2. 3. 課題設定
3. 方 法
  3. 1. 語彙意味論的方法
  3. 2. アンケート調査
4. 結果と考察
  4. 1. 語彙の意味関係
  4. 2. 語彙の使用条件
5. 日本語の BKKV との対比
6. 展 望

## 1. 理論的予備考察

本章では、コミュニケーション行動評価概念について解説する。

### 1. 1. 「Höflichkeit」とコミュニケーション行動評価概念 (BKKV)

どの言語にも、コミュニケーションにおいて相手や自分のコミュニケーション行動や社会的振る舞いをメタコミュニケーションのレベルから評価する語

彙がある。たとえば、日本語なら「丁寧な」「親切な」「やさしい」「生意気な」「尊大な」など、ドイツ語なら「höflich」「freundlich」「zuvorkommend」「frech」「überheblich」など、英語なら「polite」「friendly」「kind」「impudent」「pompous」などがそれにあたる。これらの表現は、言語的および非言語的相互行為において有効な社会的規範との関連でコミュニケーション行動を評価する概念を表示する。これらの概念は、専門文献ではしばしば日本語なら「丁寧さ」、ドイツ語なら「Höflichkeit」、英語なら「politeness」といった理論的上位概念のもとにまとめられる。

こういった術語には、しかしながら、問題があるよう思える。というのも、「丁寧さ」「Höflichkeit」「politeness」は、個別言語において具体的な対象概念であると同時に、それらを包括する理論的な上位概念としても用いられているからである。不必要な混乱を避けるために、われわれの研究グループはHermanns (1993)に基づき、それに替わる別の用語として「コミュニケーションの徳概念」を提案した(Marui *et al.* 1996)。その用語は、ドイツ語では「Konzepte von kommunikativen Tugenden」、英語では「Concepts of communicative virtues」である。しかし、英語の用語には、宗教的な意味合いと関連づけられる恐れのある「virtue」が含まれているため、この用語をさらに「コミュニケーション行動評価概念」(Bewertende Konzepte kommunikativen Verhaltens, evaluating concepts of communicative behaviors)に変更した(Reinelt 1995, Nishijima 1996; 1999, 丸井 1996, Yamashita 1996)。この「コミュニケーション行動評価概念」という用語を使用することには別の利点がある。すなわち、従来の「丁寧さ」という概念の下では肯定的内容をもつ概念しか含まれなかった。しかし、「コミュニケーション行動評価概念」という中立的な用語を導入することで、肯定的な概念だけでなく、否定的な概念をも包括することが可能となる。この観点から、これまで「丁寧さ」研究という名のもとに扱われていた研究領域を拡張していくことが可能となった。以下では、上位概念として「コミュニケーション行動評価概念」を採用し、本稿の記述の際は、煩雑さを避けるために、とくに必要がなければ、BKKV と略して言及することにする。

## 1. 2. BKKV・BKKV 表現・語彙意味論

BKKV それ自体は、抽象的な概念であるため、直接に捉えることは不可能である。しかしながら、方法論として BKKV を表示する言語表現を利用し、それを分析することにより、間接的にはあるが、BKKV にアプローチすることができるはずだ。なぜなら、よく知られているように、ある言語の語彙には、その言語社会において社会的文化的に「ふつう」ないし「標準」と見なされる概念・感情・思考法・習慣などが沈殿しているからである (vgl. Hermanns 1995)。概念と語彙の間に特定の対応関係があると確実に期待できるならば、BKKV を表示する語彙の辞書記述を利用して、その概念がどのようなものかを引き出すことができるだろう。辞書の語義情報に基づいて、BKKV 研究を実行することが可能となるわけである (Nishijima 1996; 1999)。このような方向の研究を本稿では BKKV の語彙意味論的研究と呼ぶことにする。BKKV 表現の語彙情報を援用して行なわれる、このような調査は、BKKV のさらなる研究の基礎となることが期待される<sup>1)</sup>。

## 1. 3. 社会的・文化的に特徴づけられた BKKV

BKKV は、それぞれの言語社会において歴史的に社会的・文化的な影響を受けながら発展してきた。それに考慮すると、BKKV に関してつぎのようにいくつかのテーゼをたてることができる：

1) BKKV は、言語ごとに異なる。

ドイツ語の「höflich」は「Hof (宮廷)」に、日本語の「丁寧」は古代中国で警告や情報提供のために用いられていた楽器にそれぞれ由来する (Ehlich 1991, Nishijima 1995)。

2) BKKV は、特定の言語社会内でさえ必ずしも均質というわけではない。ある言語社会内で学生、教授連、バス運転手といったさまざまな社会グループごとにいろいろな変異がありうる。

3) さらに、ある言語社会のある特定の社会グループ内でも必ずしも均質とは言えない。

ある特定の社会グループ内で、BKKV の使用慣習が異なることも

ありうる。たとえば、BKKV 使用の性差がそれにあたる (Mattheier 1984)。

この考察に基づいて、つぎのような三つの興味深い課題を提示することができる：

- 1) ある言語社会内で、社会グループごとに BKKV の使用を比較
- 2) ある社会グループ内で BKKV の使用を比較
- 3) 異なる言語社会について、対応する社会グループごとの BKKV の使用法を比較

#### 1. 4. BKKV と通常性

ある言語社会において特定の振る舞いとその社会の行動規範に適合しているなら、その振る舞いは当該社会において適切とみなされ、通常、肯定的に評価される。肯定的に評価された振る舞いは、たいていの場合、その社会において、無意識で実行されたり、また、期待される良好な協調方法と見なされる。相互行為のそのような協調方法は、個別言語社会において通常性を構成する（その意味で、「無標」(unmarked)である)。通常性を引き出すためには、肯定的に評価された BKKV だけでなく、否定的に評価された BKKV も分析することが重要である。なぜなら、否定的に評価された BKKV は当該社会のコミュニケーション行動において通常性がどのようなものを浮き彫りにすることになるからである<sup>2)</sup>。

## 2. 問題設定

### 2. 1. 「höflich」はドイツ語の BKKV を代表するか

上で述べたように、コミュニケーション行動を評価するためのメタ概念を日本語では「丁寧さ」、ドイツ語では「Höflichkeit」、英語では「politeness」で代表させることは、言語学の伝統である。この三つの概念は、一般的に翻訳関係にあると見なされるため、この概念の内容が同一であるかのような印

象を与える。しかし、すでに見たように、これらの概念は、まったく異なる意味をもっている。なぜなら、それらは、歴史的に、また、社会的文化的にまったく別々に発達してきたからである。この観点から、これらの概念についてその類似点と相違点を見つけ出すことは興味深い課題である。その課題に取り組むためには、それぞれの言語で、この代表する概念が他のどのような概念と意味的に関連しているのかを明らかにする必要がある。ここでは、ドイツ語の「Höflichkeit」と、それと意味論的に関連する概念およびその用法との関係が重要である。

専門文献では、「Höflichkeit」という概念は、たしかに重要である。しかし、日常的なコミュニケーションにおいては、通常、この概念だけでなく、たとえば「offen」(オープンな)、「distanziert」(距離をおいた)など他の関連する概念も考慮しながら行動している。「Höflichkeit」という概念は、それが専門文献で使用されているように、ドイツ語のコミュニケーション行動評価概念を本当に代表していると言えるのだろうか。筆者は、この概念は日常生活においてそれほど代表的ではないと考える。さらに日常的なコミュニケーションにおいてもそれほど関連性がある概念には思えない。というのも、「Höflichkeit」という語の辞書上の意味記述には、日常的なコミュニケーションで通用するどんな意味も記されていないからである。この点については Reinelt (1995) が詳しい。

Reinelt (1995) は、実用ドイツ語辞典を用いて「höflich」という語の意味の変遷を明らかにしようと試みている。ここでいう意味変化は、この語の原義が空虚化していくことである。「höflich」という語は、かつては「Hof (宮廷)」「宮廷のしきたり」「教養のあること」などと関連があったが、現代ではこのような意味はもはや消え、おおよそ「行動規範にしたがった振る舞い」といった形式的な内容を示している。このような変遷の理由は、Reinelt (1995) によれば、コミュニケーション行動の歴史的变化の一部として説明可能である。この語は、今日では日常において関連する意味をもっていないとライネルト (Reinelt) は指摘している。そのため、この概念はコミュニケーションにおいてはほとんど重要な役割を果たしていない。ある辞書には、「Höflichkeitgemüse」<sup>3)</sup>という用例しか見あたらないという (Reinelt 1995)。

この合成語の意味は、形式的で心のこもっていない贈り物としての花束のことである。さらに、別の辞書には、「höfliche Absage」という用法が載っている。これは、通常の規範にしたがってはいるが、心のこもっていない形式的な断りを意味している（丸井 1996）。

## 2. 2. コミュニケーション上重要な概念「freundlich」

それでは、日常的なコミュニケーションにおいてより関与的な概念は何か。他者と接するとき、通常、何に注意を払っているのでしょうか。Hermanns (1993) によれば、「freundlich」という語で表示される意味内容だという。この語は、日常的なコミュニケーションにおいて頻繁に現われる「微笑みをたたえた顔の表情」を含意している。「feindlich」の反義という意味で、この「Freundlichkeit」は重要である。

Hermanns (1993) において試みられているのは、三つの異なる時代（1796, 1876, 1989）に発行された辞書の情報に基づいて、「freundlich」という語の歴史的な意味変遷を明らかにすることである。18・19世紀の辞書情報によれば、「freundlich」という語は、「Empathie（好意）」「Freundschaftlichkeit（友情）」を意味していた。しかし、現代では、他人と形式的に接する場合の「Liebenswürdigkeit（愛想）」を表わしている。この語彙の意味変化は、使用領域の拡張をもたらし、そして規範的な形式によってこの語の意味の個人的な要素が規範的な形式に置き換えられてしまったのである<sup>4)</sup>。この意味変化は、ヘルマンズ（Hermanns）によれば、この語の頻繁な使用によるインフレーションによって生じたものだという。今日では形骸化した「freundlich」のかつての意味に対応するのは、Hermanns (1993) によると、「herzlich（心から）」である。

## 2. 3. 課題設定

前節でとりあげた Reinelt (1995) と Hermanns (1993) の二つの研究は、それぞれ「höflich」と「freundlich」という別の語を扱っているが、両者は共通して、類似の語義変化を示している。すなわち、両語とも傾向として、今日では他者との日常的な接触において形式を強調するということである。こ

の傾向は、実は日本語のBKKVにおいても認められる。たとえば、「丁寧」がその例である(Nishijima 1995)。BKKV表示語彙の意味変化においてこのような傾向がどの程度まで一般的に見られるかを調査することは興味深い課題であるが(丸井 1996)、本稿ではこれ以上立ち入らない。ここではむしろ、「höflich」と「freundlich」の間の意味論的關係と、両語の日常的な使用法に集中しよう。したがって、われわれの課題はつぎのようになる：

- 1) 「höflich」と「freundlich」との間にどのような関係があるのか。
- 2) 日常生活においてこのような概念はどのように使われているか。

上記課題を明らかにするために、辞書情報法と統計的手法の二つの方法を用いることにする。

### 3. 方 法

#### 3.1. 語彙意味論的方法

すでに述べたように、本稿では、まず実用辞書の語義説明情報を利用した語彙意味論的方法を用いる。実用辞書を使用するのは、日常的使用法を明らかにしたいからである。一般的には、つぎの手続きが考えられる：a) ある言語について類義と思われるBKKVを表わす語彙を収集する；b) 辞書の語義情報に基づいて、意味論的に互いに関連する語どうしを関係づける；このようにして、c) BKKV語彙の一部の意味にもとづいて構造化する。本稿ではより具体的に、つぎの手続きを採用する。すなわち、BKKVを表わす語一つひとつについて複数の実用辞書を利用することにより、語義説明で使用されるすべての説明語彙を引き出し、それら一つひとつについてもその説明語彙をすべて洗い出す。このような作業を繰り返す。このようにして、最終的に、クロスレファレンスが生じる。この相互的指示関係にもとづいて、意味構造としてのネットワークを明らかにする(vgl. Reinelt 1995, Nishijima 1995; 1999)。

辞書を用いた調査は、当然のことながら、ある特定の同じ時期に出版され



た辞書記載には共通点がありうるということを前提としている。この意味で、この研究では、複数の辞書の BKKV 表示語彙の記述からその共通点として「中間値」ないし「平均値」を探ることが問題となる。その際の問題点として、ある言語の辞書を用いて明らかにされた BKKV は、それぞれの言語社会の個別の社会集団ごとについてどの程度有効なのか、という問題である。このようにして明らかにされた BKKV の構造は、今後の研究の基礎となる。この基礎は、他の方法で検証されなければならない。たとえば、一つの可能性としてはアンケート調査が考えられる。それは、次節のように、情報提供者に対して BKKV に関する知識を尋ねることとなる。

### 3. 2. アンケート調査

日本語のいくつかの BKKV についてはすでに Yamashita (1996) においてアンケート調査法により分析されている。その成果と比較可能なように、Yamashita (1996) の調査方法に準拠して、ドイツ語の BKKV について調査をすることにした。

アンケート調査の手続きは、つぎのとおり：(1)ある言語共同体内部での社会グループを選択する。本稿では Yamashita (1996) との比較のために、学生グループを選択する；(2)学生グループ内で女子学生と男子学生に対して BKKV の知識に関してアンケートをとる；(3)これにより、学生グループについて、BKKV の辞書的な意味構造がどの程度まで有効なのかを明らかにする；(4)さらに BKKV 使用について女子学生と男子学生との間の類似点と相違点を抽出する<sup>5)</sup>。

本研究では、ドイツ人学生が対象となっているが、それは、使用状況によってどの BKKV が引き合いに出され、社会的要因としての性差が BKKV の使用にどの程度影響を与えうるかを明らかにすることになる。

## 4. 結果と考察

### 4. 1. 語彙の意味関係

次ページの図は、「höflich」と「freundlich」の辞書記述情報の分析結果を



示している<sup>6)</sup>。この図から読み取れることは、少なくとも二点ある。一つは、これらの語彙が高度に構造化されているということである。もう一つは、このネットワーク内で基礎的な語彙項目は、「liebenswertig (愛想のいい)」「höflich (丁寧な)」「zuvorkommend (親切な)」「hilfsbereit (協力的かつ親切な)」「freundlich (きさくな)」「aufmerksam (気の利く)」であるということだ。なぜなら、これらは、相互に関連づけあっているため意味論的な円環構造を形成しているからだ。

この構造において、「距離をおいた」と「情緒的」という二つの異なる方向性を区別することができる。図の右側に配置された語彙は、傾向としてはあるが、「形式的」ないし「距離をおいた」という属性で特徴づけることができる。左側にある語彙は、逆に「個人的」ないし「情緒的」という意味合いをもつ傾向が認められそうだ。

「liebenswertig」と「freundlich」という語は、調査した4冊の辞書では共通して相互に関連付けられている。したがって、両者はほとんど同一の意味をもっていると見なしてもよからう。「liebenswertig」は、「verbindlich (愛想のいい)」と「zuvorkommend」を介して「höflich」と結びつけられているだけではなく、直接的にも「höflich」とも関連づけられている。「freundlich」も「höflich」と結びついているが、それは「aufmerksam」を介してだけではなく、直接関連づけられてもいる。「höflich」は4冊すべての辞書で「rücksichtsvoll / Rücksicht nehmen (思いやりのある)」を、また、3冊の辞書に共通して「Normen / Umgangsformen gemäß (規範にしたがった)」を指示している。「zuvorkommend」は4冊すべての辞書で「höflich」と「hilfsbereit」に言及している。

注目すべきは、「nett (親切で感じのいい)」という語が前ページの図のどこにも存在しない点である。この語は、それ自体を辞書で調べると、たとえば「freundlich u. liebenswert, im Wesen angenehm」(DUW, 1134)と記され、上で扱われている「freundlich」が含まれている。その意味で上記の語彙グループに属するはずなのに、4冊の辞書のどれにも説明語として登場していない点が理解できない。今のところ、なぜ「nett」がこの語彙構造に現われないのかについては不明である。

## 4.2. 語彙の使用条件

### 4.2.1. 一般的な使用条件

BKKVが学生という社会グループ内でどのように使用されているかを明らかにするために、Yamashita (1996) にしたがってアンケート調査を実施した。調査対象者のドイツ人学生にはつぎの三タイプの話し相手を想定させた。すなわち：1) とても親しく同じ年齢の「親友」；2) それほど親しくはないがほぼ同じ年齢の「同僚（同級生）」；3) 親しくなく、またかなり年齢差のある「教授」，である。第一と第二の対話相手の違いは、親しさにある。第二と第三の相手の違いは、社会的な差，すなわちここでは年齢と権力（Power）である。大学では通常、教授が学生に対して権力をもっている。したがって、第一と第三との違いは、親しさと社会的な差が関わるので二重の差があると言える。

有効な回答のあった調査対象者は、ハイデルベルク大学でドイツ学（Germanistik）ないし日本学（Japanologie）を専攻しているドイツ人学生40名である<sup>7)</sup>。そのうち、10名が男性で、30名が女性という分布となっている。調査対象者には、上に挙げた三タイプの話者それぞれと話をするとき、上の図を参考に列挙された概念のうち、とくにどの概念に注意を払うかを尋ねた。表1の数値は、使用率（%）を表わしている。カッコの左側にある数値は、当該の概念に関する調査対象者の頻度を示しているが、他方、括弧内の左右に区分された二つの数値はそれぞれ男性と女性の使用頻度を表わしている。

この表1を横方向に眺めると、概念と対話相手との間に相関関係があることが読み取れる。すなわち、調査された概念の使用頻度は、対話相手ごとに異なる。調査結果が示しているのは、たとえば、「offen」という概念については、親友と話すときに調査対象者の95%以上がそれに配慮するが、同僚（同級生）が話し相手の場合には37.5%しかこの概念に配慮していない。親しくもなく、また社会的距離も離れている教授が話し相手ならば、この概念の使用率は27.5%に下がる。「höflich」の使用については、ほとんどの調査対象者が、同僚（同級生）に対しても教授に対しても、そのどちらと話すときも「höflich」という概念に配慮すると回答している。他方、親友に対してはこの概念を想定すると回答した情報提供者はそう多くない。このように表を横方向に眺めると、これらの概念は4グループに分けられる。第一グルー

表 1

	guter Freund (親友)	nicht so vertrauter Kollege (それほど親しくない同僚 (同級生))	Professor (教授)
a) <i>offen</i> (オープンな)	95.0 (100.0 / 93.3)	37.5 (50.0 / 33.3)	27.5 (30.0 / 26.7)
b) <i>höflich</i> (丁寧な)	65.0 (80.0 / 60.0)	97.5 (100.0 / 96.7)	100.0 (100.0 / 100.0)
c) <i>freundlich</i> (親切な)	95.0 (100.0 / 93.3)	100.0 (100.0 / 100.0)	97.5 (100.0 / 96.7)
d) <i>gemäß den üblichen Umgangsnormen</i> (礼儀正しい)	27.5 (30.0 / 26.7)	95.0 (100.0 / 93.3)	95.0 (100.0 / 93.3)
e) <i>unverkrampt</i> (気楽)	100.0 (100.0 / 100.0)	45.0 (40.0 / 46.7)	18.4 (10.0 / 21.4)
f) <i>sich der sozialer Beziehung zu dem Partner bewußt</i> (わきまえ)	62.5 (90.0 / 53.3)	70.0 (60.0 / 73.3)	90.0 (70.0 / 96.7)
g) <i>taktvoll</i> (要領よく)	55.0 (70.0 / 50.0)	95.0 (100.0 / 93.3)	92.5 (80.0 / 96.7)
h) <i>ohne Distanz</i> (距離なく)	75.0 (80.0 / 73.3)	10.0 (0.0 / 13.3)	0.0 (0.0 / 0.0)
i) <i>herzlich</i> (心から)	90.0 (70.0 / 96.7)	27.5 (10.0 / 33.3)	10.0 (10.0 / 10.0)
j) <i>zuvorkommend</i> (親切な)	67.5 (70.0 / 66.7)	65.0 (70.0 / 63.3)	75.0 (60.0 / 86.7)
k) <i>liebenswürdig</i> (愛想のいい)	72.5 (70.0 / 73.3)	60.0 (60.0 / 60.0)	57.5 (50.0 / 60.0)
l) <i>entgegenkommend</i> (好意のある)	92.5 (90.0 / 93.3)	90.0 (100.0 / 86.7)	87.5 (90.0 / 86.7)
m) <i>aufmerksam</i> (気の利く)	97.5 (100.0 / 96.7)	90.0 (80.0 / 93.3)	92.5 (100.0 / 90.0)
n) <i>rücksichtsvoll</i> (思いやりのある)	72.5 (90.0 / 66.7)	90.0 (100.0 / 86.7)	87.5 (100.0 / 83.3)
o) <i>nicht kränkend</i> (傷つけない)	70.0 (80.0 / 66.7)	87.5 (100.0 / 83.3)	92.5 (90.0 / 93.3)

プは、会話相手間でその使用にそれほど大きな差が認められない概念である。第二グループは、親友に対しては頻繁に使用されるが、同僚（同級生）や教授に対してはそれほど多くないか、もしくはほとんど使用されない概念である。第三グループは、このそれほど親しくない相手である同僚（同級生）や教授とコミュニケーションする際、共通して頻繁に引き合いに出される概念である。第四グループは、もっぱら教授に対してかなり頻繁に考慮される概念である。

第一グループに属するのは、「freundlich」「aufmerksam」「entgegenkommend」「zuvorkommend」「liebenswürdig」「rücksichtsvoll」という概念である。これ

らのグループは、さらに約90%以上の高率かそれ未満かという頻度によって二つの下位グループに分けられる。きわめて頻繁に用いられるのは、「freundlich」(95.5-100.0-97.5)、「aufmerksam」(97.5-90.0-92.5)、「entgegenkommend」(92.0-90.0-87.5)である。ところが、「zuvorkommend」「liebenswert」「rücksichtsvoll」はそれほど頻度が高くない。それぞれ(67.5-65.0-75)(72.5-60.0-57.5)(72.5-90.0-87.5)である。これらの概念は、辞書記述の分析によって明らかにされた意味論的に互いに関連づけられた基礎概念(上の図)と比較することができる。これらの二つの概念間で共通点と相違点がある。共通しているのは、「liebenswert」「freundlich」「aufmerksam」「zuvorkommend」である。しかし、注目すべきは、図では基礎語彙の中心となっている「höflich」がこの第一グループに属していないということだ。この観点からすると、今日ドイツの日常的なコミュニケーションで一般的に重要だと見なされる概念は、「höflich」ではないといえそうである。そのかわりに代表となりうるのは、「freundlich」である。というのは、「freundlich」という概念だけが、すべての対話相手に対して95%以上引き合いに出され、そのためコミュニケーションにおいて義務的といえるほどの一般的妥当性をもっているからである。

二つめのグループには、「offen」「unverkrampft」「ohne Distanz」「herzlich」が属する。さらに、とりわけ教授に対して「ohne Distanz」を考慮して話をしてはいけないことが伺われる。三つ目のグループには、「höflich」「gemäß den üblichen Umgangsformen」「taktvoll」「nicht kränkend」という概念が含まれる。四つ目のグループに「sich der sozialen Beziehung zu dem Partner bewußt」である。

これらの結果から言えることは、親友が相手の場合の概念分布と同僚(同級生)および教授が相手の場合の概念分布がほぼ対称関係にあるということ、また、心理的な親しさは、BKKVの使用における関与的な要因の一つであるということだ。たとえば、第二グループの概念である「offen」「unverkrampft」「ohne Distanz」「herzlich」は、親友とのコミュニケーションの場合とそれ以外のそれほど親しくない二タイプの相手の場合と比べると、前者のほうが後者よりおよそ50ポイント程度の差を伴って頻繁に引き合いに出される。と

ころが、第三グループに属する概念は、同僚（同級生）や教授と話す場合には共通して非常に頻繁に考慮される。このことからいえるのは、年齢はドイツ語による日常的なコミュニケーションにおいてはそれほど関与的でないということである。BKKV使用のこのような異なる分布は、DuとSieとの使用法の違いを思い起こさせる（vgl. Brown/Gilman 1960）。ドイツの大学において学生は、一種の慣習として、実際には親しくなくてもお互いを通常Duを使って呼びかける。これは、学生にとってはある種の心理的な葛藤を引き起こしうる。同級生（同僚）と話す場合に「offen」と「unverkrampt」という概念への配慮の頻度の低さがこの葛藤状態を反映しているように思われる<sup>8)</sup>。

#### 4. 2. 2. BKKV 使用の男女差

BKKVの使用には男女差があるのだろうか。ある種概念には、そのような差は存在する。上の表1の括弧内の数値は男女別の頻度を表わしている。左側の数値は男性を、右側の数値は女性を示している。ここではさしあたり、男女による差が20ポイントある場合、それを性差の反映ととることにしよう。

親友とのコミュニケーションにおいて性差が認められる概念は、「höflich」「sich der sozialen Beziehung zu dem Partner bewußt」「taktvoll」「herzlich」「rücksichtsvoll」である。「höflich」「sich der sozialen Beziehung zu dem Partner bewußt」「taktvoll」「rücksichtsvoll」という概念は、親友とのコミュニケーションでは男女の平均ではそれほど頻繁には考慮されない。ところが、これらの概念の使用について、男女を比べてみると、男性のほうが女性よりも頻繁に配慮する概念であることがわかる。ただし、「herzlich」という概念は、男性よりも女性のほうが頻繁に考慮される。さらに「herzlich」と「ohne Distanz」の分布はたしかにほとんど同じだが、性差が認められる。「herzlich」の使用におけるこのような傾向は、同級生（同僚）とのコミュニケーションにおいても認められるが、その場合、この概念は、平均的にはそれほど考慮されない。この事実に基づいて言えることは、男性は親友とのコミュニケーションにおいてさえ、傾向としてではあるが、たとえば相手との社会的関係といったより形式的な点を考慮するということである。それに対して女性は、心理的な近さをより重要とみなす。

教授とのコミュニケーションに関しては、「sich der sozialen Beziehung zu dem Partner bewußt」と「zuvorkommend」という概念において性別による使用差が認められる。両概念とも平均的にはかなり頻繁に配慮されるが、女性と男性を比較すると、女性のほうがより多く配慮していることがわかる。注目すべきなのは、「sich der sozialen Beziehung zu dem Partner bewußt」という概念の分布が、親友と教授とのコミュニケーションにおいて対称的であるということだ。この概念は、親友と話す場合、女性と比べて男性のほうが頻繁に考慮される(90.0/53.3)。ところが、教授と話す場合は、男性よりも女性のほうがより頻繁に考慮している(70.0/96.7)。その理由は、現在のところ不明である。「zuvorkommend」という概念は教授と話す際、男性よりも女性のほうがより頻度が高い(60.0/86.7)。

#### 4. 2. 3. 「höflich」と「freundlich」の連想語彙における性差

前節では、BKKVの使用において性差が存在する可能性が高いことを示唆した。性別による使用法の違いを他の視点から見直してみたい。

調査では、40名の学生(うち男子学生10名、女子学生30名)に対してさらに、「freundlich」という語を耳にしたときどのような語をほかに連想するかという質問をした。この問いに対して、182の重要なデータが得られた(そのうち、男性は44、女性は138)。ここにおいても男女差が認められた。その結果を述べる。

「freundlich」という語の連想語：

男性の場合：「höflich」「zuvorkommend」(各40.0%)「offen」「locker」  
「nett」(各20.0%)

女性の場合：「nett」(40.0%)「lächeln/d」(36.7%)「sympathisch」  
(33.3%)「Freund」「offen」(各26.6%)「höflich」  
(20.0%)

さらに学生たちに対して、「höflich」という語を耳にしたとき、どのような語を連想するかという調査も行なった。その結果、126の有効な回答を得



た（そのうち、男性が26、女性が100）。結果は以下のとおりである。

「höflich」という語の連想語：

男性の場合：「freundlich」「zuvorkommend」「nett」（各20.0%）

女性の場合：「Gute Erziehung」「distanziert / Abstand」「Umgangsformen/-regeln」（各30.0%）「Respekt」（20.0%）

これらの結果が示しているのは、男性は連想において「freundlich」と「höflich」の間に大きな違いを見ていないということである。なぜなら、それぞれについて他方が出現しているからである。換言すれば、男性は両概念を類似のものに見なしているということになる。これは、辞書による説明と一致する。他方、女性は「freundlich」と「höflich」の間に違いを認めている。女子学生たちは、「freundlich」を感情に関する語彙に、「höflich」を形式的な振る舞いと関係付ける傾向にある。このような傾向は、両概念の使用における性差を裏付けるものだと言ってもよからう。すなわち、男性は、「höflich」という概念を「freundlich」と同様にどの話し相手に対しても同等に頻繁に考慮する。したがって、両概念は同じく扱われている。ところが、女性は、「höflich」を親友と話すときはそれほど頻繁に考慮していない（60.0%）。

## 5. 日本語のBKKVとの対比

本節では、われわれの調査結果と Yamashita (1996) のそれとを比較してみよう。

Yamashita (1996) は、日本の異なる地域にある三つの大学に在籍している学生を対象に「丁寧」を含む八つの異なる概念が3タイプの相手（親友、それほど親しくない同級生、親しくなく年齢差のある大学教員）に対してどのように使用されるかについて調査を行なった。その結果は、表2に掲げるとおりである（単位は%）。

その結果によれば、この八つの概念は三つのグループに分類できる：

1) 「ざっくばらん」「親しみ」「気楽」「距離なく」

これらは、親友とのコミュニケーションにおいてきわめて頻繁に考慮される。

2) 「ていねい」「礼儀正しい」「わきまえ」

これらは、親しくなく年齢差のある大学教員とのコミュニケーションの際、頻繁に考慮される。

3) 「傷つけない」

これは、それほど親しくない同級生とのコミュニケーションの際、注目される。

興味深いのは、第一と第二グループの分布が対称的だということである。この分布から、Yamashita (1996) が引き出したのは、第二グループの概念は教員に対する頻繁な使用からすると義務的であり、第一グループの概念は教員とのコミュニケーションにおいて少なくとも期待されていないということである<sup>9)</sup>。

表 2

	guter Freund (親友)	nicht so vertrauter Kollege (それほど親しくない 同僚(同級生))	Lehrer (教員)
<i>zakkubaran</i> (ざっくばらん)	89.8	45.1	5.0
<i>teinei</i> (丁寧)	10.6	58.7	97.8
<i>shitashimi</i> (親しみ)	77.1	52.7	21.3
<i>reigitabashii</i> (礼儀正しい)	9.4	51.3	99.1
<i>kiraku</i> (気楽)	96.9	53.6	12.6
<i>wakimae</i> (わきまえ)	33.8	71.4	96.9
<i>kizutsukenai</i> (傷つけない)	70.4	91.5	80.9
<i>kyorinaku</i> (距離なく)	79.2	23.7	5.4

Yamashita (1996 : 286) より

われわれの調査結果を表わす表を、Yamashita (1996) の結果と比較できるように配列順序を変更すると、表 3 のようになる。比較のために表 2 と表 3 をならべて表示してみよう。

両者を比較すると、次の点が指摘できる。両言語で比較的類似した分布を示すBKKVは、e) 「unverkrampft」-「気楽」、o) 「nicht kränkend」-「傷つけない」、h) 「ohne Distanz」-「距離なく」である。逆に極めて異なる分布を示す概念は、b) 「höflich」-「ていねい」、c) 「freundlich」-「親しみ」、d) 「gemäß den üblichen Umgangsnormen」-「礼儀正しい」で

表 3

	guter Freund (親友)	nicht so vertrauter Kollege (それほど親しくない同僚 (同級生))	Professor (教授)
a) <i>offen</i>	95.0	37.5	27.5
b) <i>höflich</i>	65.0	97.5	100.0
c) <i>freundlich</i>	95.0	100.0	97.5
d) <i>gemäß den üblichen Umgangsnormen</i>	27.5	95.0	95.0
e) <i>unverkrampt</i>	100.0	45.0	20.0
f) <i>sich der sozialen Beziehung zu den Partner bewußt</i>	62.5	70.0	90.0
o) <i>nicht kränkend</i>	70.0	87.5	92.5
h) <i>ohne Distanz</i>	75.0	10.0	0.0

表 1 より作成

表 2

	guter Freund (親友)	nicht so vertrauter Kollege (それほど親しくない同僚 (同級生))	Lehrer (教員)
<i>zakkubaran</i> (ざっくぼらん)	89.8	45.1	5.0
<i>teinei</i> (ていねい)	10.6	58.7	97.8
<i>shitashimi</i> (親しみ)	77.1	52.7	21.3
<i>reigitadashii</i> (礼儀正しい)	9.4	51.3	99.1
<i>kiraku</i> (気楽)	96.9	53.6	12.6
<i>wakimae</i> (わきまえ)	33.8	71.4	96.9
<i>kizutsukenai</i> (傷つけない)	70.4	91.5	80.9
<i>kyorinaku</i> (距離なく)	79.2	23.7	5.4

Yamashita (1996 : 286) より

ある。「höflich」は、同僚（同級生）と教授に対してとりわけ頻繁に考慮されたが、親友に対してはそれほど頻繁ではなかった。専門文献では「höflich」と翻訳関係にある「ていねい」は、教員に対してのみ頻繁に考慮されるが、親友とのコミュニケーションではほとんど考慮されない。この比較で見取れるのは、「höflich」と「ていねい」は、専門文献では等価に扱われているが、その分布においてきわめて異なる振る舞いをしているということである。「freundlich」は、どの会話相手に対しても同じように頻繁に考慮される。ところが、それに対応すると見られる「親しみ」は、親友に対しては極めて頻繁に考慮されるが、それ以外はそれほどではない。この違いは、翻訳と関係している。換言すれば、「親しみ」は必ずしも「freundlich」に対応しているわけではない。この点については本稿ではこれ以上立ち入らない<sup>10)</sup>。

「gemäß den üblichen Umgangsnormen」と「礼儀正しい」の分布の違いは、年齢差という要因が日本では他者との関わりにおいてドイツよりも重要だということに基づいている。この比較から一般的に言えることは、ドイツ語の

BKKVの使用にとって年齢は日本語よりも関与的でないということである。

## 6. 展 望

これまでのことをまとめよう。辞書調査と40名を対象としたアンケート調査に基づいて、BKKVはカテゴリー化できるということ、そして、それらはさらに性差という特徴をもつということがわかった。この結果を確認するために、あるいは、この結果が一般的に妥当するかどうかを検証するために、さらに異なる社会グループも含めてより多くの被験者を対象にして調査を進めていく必要があるだろう。

日本語とドイツ語のBKKVの異文化間比較では、二つの言語の対応するBKKVの使用において共通点と相違点が確認された(Nishijima 1999)。その際、「親近性」という要因がドイツ語のコミュニケーションにとって重要であるが、日本語ではさらに「年齢」という要因が関与してくることが確認できた。この違いがそれぞれの言語の言語的・非言語的表現におけるBKKVの使用条件にどのような形で反映されるのかを調査することは興味深い課題であろう。より興味深いと思われるのは、BKKVの使用条件の男女差とそのBKKVを実現する言語的・非言語的表現との間の関連性の調査であろう。このような異文化間の研究によって、それぞれの言語のコミュニケーションにおいて何が関与的で当たり前なのかを明らかにすることができる。このようなコミュニケーションにおける通常性に関わる研究は、異文化間コミュニケーションの向上に貢献することが期待できる。

### 注

\* 本稿は、下記の拙論の改訂日本語版である：

'Freundlich' und 'höflich': Interkulturelle Aspekte des kommunikativen Verhaltens.

In: 金沢大学外国語教育研究センター『言語文化論叢』第4号, 2000, 185-207.

なお、上記拙論は、1998年2月7日にハイデルベルク大学で行なわれた社会言語学者研究発表会(Soziolinguistentag)での口頭発表原稿に加筆したものである。

1) ここで指摘しておかなければいけないことは、BKKVとそれを表わす言語表現は、

それぞれ別の次元にあるので、注意して分けて扱われなければならないということである。なぜなら、両者は、たがいに独立して発展し、変化しうる存在だからである。なお、BKKVは、語彙化の有無によって、さらに二つにグループ分けができる。たとえば、「freundlich」や「höflich」は語彙化されている。ところが、「nicht kränkend」は十分に語彙化されているとはいえない。したがって、両者は注意深く別々に扱われなければならない。この問題については、ここではこれ以上は立ち入らない。詳細な議論は、Hermanns (1995)を参照のこと。

- 2) 協調と通常性についての詳細は、Marui (1996) および丸井 (2006) を参照のこと。  
 3) キュッパの『絵入り日常ドイツ語辞典』(*Illustriertes Lexikon der deutschen Umgangssprache*) にはつぎの二つの用例が載っている (Küpper 1983: S. 1308) :

**Höflichkeitsgemüse** n Blumenstrauß als Mitbringsel des Gastes. Burschikose Wertminderung. 1950ff.

**Höflichkeitshappen** m Reststück auf der Aufschnittplatte. Vgl. Anstandshäppchen. Seit dem späten 19. Jh.

- 4) このように、もともと親しい関係の中での共感や友愛を意味していた「freundlich」が、その使用範囲の拡大と多用にともない、それ以外の場面においても対等関係を前提とした協調の創出・維持を特徴づけるようになってきた。このような特徴を明らかにしてくれる「freundlich」の具体的な使用例をここで紹介しておこう。ドイツのハイデルベルクで開催されたあるフリーマーケットでのことだ。値段交渉という場面で、筆者の妻がある品物の値段をだいが安くするようかなりしつこく売り手にせまっていた。この要求に手を焼いた売り手は、とうとう「Dann ist die Freundlichkeit weg.」と応じた。つまり、これ以上値段は下げられない。もしそれ以上の値下げを要求するのなら、値段交渉というコミュニケーション行動においてこれまでの「Freundlichkeit」は失われてしまうぞと警告しているわけである。この用例から、「Freundlichkeit」は人付き合いにおいて最低限必要とされる形式的かつ友好的な関係を創り出し、維持する態度を表わしていることがわかる (西嶋 1999)。  
 5) Yamashita (1996) では、性差は扱われていない。  
 6) ここで使用したのは、1986年から1996年の間に出版され、しかも日常的に使用されている実用ドイツ語辞典4冊である :

*Knaurs Großes Wörterbuch der Deutschen Sprache*. München: Droemer Knaur, 1985.

*Langenscheidts Großwörterbuch: Deutsch als Fremdsprache*. Berlin: Langenscheidt, 1983.

*Wahrig Deutsches Wörterbuch*. Gütersloh : Bertelsmann, 1994.

*Duden Deutsches Universalwörterbuch A-Z*. Mannheim usw.: Dudenverlag, 1996.

なお、図中の記号「K」「L」「W」「D」は上記辞書に対応する略号(頭文字)である。

- 7) インフォーマントの人数はたしかに統計学的には不十分であるかもしれない。しか

し、パイロット調査としてある種の傾向を見出す機能は果たしているだろう。もちろん、今後、規模を拡大して調査をする必要がある。

- 8) ドイツ人学生に聞き取り調査をしているときに入手できた *duzen* (親称 *du* を使って話す) と *siezen* (非親称 *Sie* を使って話をする) の使い分けに関する話を紹介しよう。原則として、親しい家族や友人どうしはお互いを *du* で呼びあい (*duzen*)、それ以外の知り合いは *Sie* で話をする (*siezen*)。学生どうしなら、友人でなくともいきなり *du* を使って話してもかまわない。学生と教授は *Sie* を使って話をするのが一般的である。ところが、リベラルな発想をもったある教授は、ゼミナールでは学生間だけでなく当該の教授も含めてお互いに *du* で呼び合うことを提案した。この提案を学生は受け入れたものの、実際は教授に対して *du* を使って直接に話すことには抵抗があったそうである。そこで、*man* を主語にする方法などを用いて、なるべく *du* を使わないやり方で会話をしたとその情報を提供してくれた学生は証言していた。それほど、親しくない人物に対して *du* を使うことについて心理的な負担が大きいことがわかる。
- 9) この結果は、二つの点で興味深い。第一に、統計的な調査が、「丁寧」と「礼儀正しい」との意味が、Nishijima (1995) の辞書調査によって示したのと同様に、話者の意識の中でほぼ等価であることを明らかにしているからである。第二は、まだ十分に語彙化されていず、そのためかなり新しい概念である「傷つけない」が、それほど親しくない友人との接触の際にとりわけ重要な役割を果たしていることがわかったからである。そのような相手は、話者との関係が安定しているとはいえず、むしろゆれているのである (vgl. Hermanns 1995)。この「傷つけない」という概念は、明らかに「やさしさ」という概念と関係がある。「やさしさ」は、日本では、他者とのコミュニケーションにおいてとりわけ重要な概念の一つと見なされている。大平 (1995) では臨床精神病理学研究に基づいて、「やさしさ」という語の意味が最近変化しつつあるかまたは変化したと指摘している。「やさしさ」は他者との接触においてもつことが期待される徳の一つである。大平 (1995) によれば、この語は、およそ30年前の1965年当時はまだ他者に対する連帯と積極的な関与に基づく共感を意味していたという。ところが、現在のこの語の意味は、他者を傷つけないように距離をおいて接する関係を表わしているという。この意味変化には、さらに形式面の前景化という傾向が見て取れる (vgl. Hermanns 1993, Nishijima 1995)。
- 10) Ide *et al.* (1992) では、「丁寧」を含む9つの日本語基本概念が、「politeness」を含む英語の対応概念と比較され、それによって両言語間の対応する概念間にどのような共通点ないし相違点があるのかを統計的に明らかにしている。その成果を簡単にまとめてみよう。

北アメリカ人は「polite」と「friendly」をほぼ類似のものと見なしているが、日本人はその対応概念である「丁寧な」と「親しげな」を対立するものと考えている。換言すると、アメリカ英語の「polite」と「friendly」は同じカテゴリーに属してい

とも言えるが、日本語の「丁寧な」は「親しげな」とは別のカテゴリーに分類される。しかし、この結果には疑問に思われる点がある。というのも、「丁寧」と「親しみ」はたしかに Yamashita (1996) が明らかにしているように異なる使用条件をもつが、両概念が対立していると思えずと主張することはできないからである。Ide *et al.* (1992) は、おそらく、日本語と英語で対応する表現を選択する際に誤りをおかしたのであろう。

日本語の「丁寧な」は、たしかにアメリカ英語の「polite」に対応している。しかし「親しげな」は、「friendly」の適切な日本語対応表現とは思われない。この問題点について、Ide *et al.* (1992) も気づいている。注でつぎのように述べられているからである：

*Sitasigena* was chosen for the purpose of the questionnaire, as an adjective corresponding to friendly, because it is the form describing the mood of someone else's behaviour rather than the subjective mood of the speaker. *Sitasii*, instead, is the form representing the speaker's subjective psychological feeling. (p.294, fn. 9)

「親しげな」という語は、他の誰かの行動の仕方だけでなく、「親しさ」のもつ外見性も強調し、他の隠された意図の可能性を示唆している。というのは、「げな」という接尾辞は否定的なニュアンスをかもし出しながら、外見性を強調するために使用される用法を有するからである。「親しげな」が、「親しそうだが実際はそうではない」ことを含意するならば、「丁寧な」と「親しげな」が対立するものと見なされるのも当然である。「friendly」の適切な日本語訳が選択されていたなら、この調査はかなり違った結果をもたらしたであろう。いずれにせよ、この調査は同じ条件下で再検証されるべきである。このように、対照研究では対応関係にあるもしくは類似と見なされる BKKV を見つけ出すことは極めて困難であることがわかる。キー概念を収集する際、注意深く適切な対応物を探すだけでなく、諸概念がそのコミュニケーションにおける関与に関してどのような布置にあるのかを考慮する必要がある。これについては、Nishijima (1999) を参照のこと。

## 文 献

- Brown, R. / A. Gilman: "The Pronouns of Power and Solidarity." In: Th. A. Sebeok (ed.): *Style and Language*. Cambridge / Mass.: MIT Press, 1960, 253-276.
- DUW: *Duden Deutsches Universalwörterbuch*. Hrsg. von der Dudenredaktion, 4., neu bearb. und erw. Auflage. Mannheim / Leipzig / Wien / Zürich: Duden Verlag, 2001.
- Ehlich, K.: "Die Geschichtlichkeit der Höflichkeit." Dortmund: mimeo., 1991.
- Hermanns, F.: "Mit freundlichen Grüßen. Bemerkungen zum Geltungswandel einer

- kommunikativen Tugend." In : W. P. Klein / I. Paul (Hgg.) : *Sprachliche Aufmerksamkeit. Glossen und Marginalien zur Sprache der Gegenwart*. Heidelberg: Universitätsverlag C. Winter, 1993, 81-85.
- Hermanns, F, "Kognition, Emotion, Intention. Dimensionen lexikalischen Semantik." In: G. Harras (Hg.): *Die Ordnung der Wörter. Kognitive und lexikalische Strukturen*. Berlin / New York: Walter de Gruyter, 1995, 138-178.
- Ide, S. / B. Hill / Y. M. Carnes / T. Ogino / A. Kawasaki: "The concepts of politeness: An empirical study of American English and Japanese." In: R. J. Watts / S. Ide / K. Ehlich (eds.): *Politeness in Language: Studies in its history, theory, and practice*. (Trends in linguistics. Studies and monographs 59). Berlin etc.: Mouton de Gruyter, 1992, 281-297.
- Küpper, H.: *Illustriertes Lexikon der deutschen Umgangssprache in 8 Bänden*. Band 4. Stuttgart: Klett, 1983.
- Marui, I.: "Zusammenstoß der Normalitäten interaktiver Kooperation im Japanischen und Deutschen." In: 『ドイツ文学論集』第29号, 1996, 58-67.
- 丸井一郎: 『言語相互行為の理論のために 「当たり前」 の分析』三元社, 2006.
- Marui, I. / Y. Nishijima / K. Noro / R. Reinelt / H. Yamashita: "Concepts of communicative virtues (CCV) in Japanese and German." In: M. Hellinger / U. Ammon (eds.): *Contrastive Sociolinguistics*. Berlin etc.: Mouton de Gruyter, 1996, 385-409.
- Mattheier, K. J.: "Sprachwandel und Sprachvariation." In: W. Besch / O. Reichmann / S. Sonderegger (Hgg.): *Sprachgeschichte*. I. Halbbd., Berlin / New York: Walter de Gruyter, 1984, 768-779.
- Nishijima, Y.: "Über den Bedeutungswandel von "teinei". – Zum internationalen Vergleich der Konzepte von kommunikativen Tugenden –." In: 『好村富士彦教授退官記念論文集』, 1995, 207-220 (改訂日本語版: 「コミュニケーション行動評価概念研究のための予備的考察 – 対照社会言語学の観点から –」. In: 『金沢大学経済学部論集』第20巻第1号, 2000, 107-132).
- Nishijima, Y.: "Bewertende Konzepte kommunikativen Verhaltens (BKKV) und soziale und kulturelle Verhältnisse. – Ein lexikalischer Ansatz anhand der Beschreibung in Wörterbüchern –." In: 『金沢大学教養部論集』第33巻第2号, 1996, 155-178 (改訂日本語版: 「コミュニケーション行動評価概念と社会的文化的背景 – 辞書の語義記述に基づく語彙論的アプローチ –」. In: 金沢大学外国語教育研究センター『言語文化論叢』第11号, 2007, 55-81).
- Nishijima, Y.: "Vorüberlegungen zur kontrastiven Untersuchung von bewertenden Konzepten kommunikativen Verhaltens (BKKV) im Deutschen und Japanischen." In: 『広島ドイツ文学』第13号, 1999, 63-78 (改訂日本語版: 『『丁寧』の意味変化 – コミュニケーション行動評価概念の異文化間比較のために –』. In: 『金沢大学



- 経済学部論集』第27巻第2号, 2007, 67-80).
- 西嶋義憲:「ドイツ語のコミュニケーション行動における *Freundlichkeit* について」  
In:『広島日独協会会報』第46号, 1999, 32-35.
  - 大平 健:『やさしさの精神病理』岩波書店, 1995.
  - Reinelt, R.: "Wie die Höflichkeit ihr Gesicht verlor." In:『愛媛大学教養部紀要』第28号, 1995, 131-160.
  - Yamashita, H.: "Zur bewertenden Konzepten kommunikativen Verhaltens.-am Beispiel des japanischen Anredeverhaltens-." In: 大阪大学言語文化部『言語文化研究』第22号, 1996, 273-294.